

都道府県番号	31
都道府県名	鳥取県

【 ①□ ②■ ③□ 】

I 学校名及び規模

学校名	米子市立啓成小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	3	2	2	2	2	1	14	18
児童数	44	64	56	61	53	60	1	339	

II 研究の概要

(1) 研究主題

自ら学び、自ら考え、共に高め合う子どもの育成
～個に応じた算数科の学習を通して～

(2) 研究主題設定の趣旨

現代社会は、国際化、情報化、科学技術の発展、さらに、環境問題、高齢化・少子化問題などあらゆる面でめまぐるしく変化している。これらの激しい変化に対応し、21世紀を創造していく子どもに育てていくことが、教育の今日的課題である。そのためには、児童一人一人に自ら学び自ら考える力などの〔生きる力〕を育成することが大切である。

本校の教育目標は、「新しい時代を創造する人間性豊かなたくましい子の育成」である。その中にある「新しい時代を創造する」は、国際化、情報化など急激な社会の変化の中で、出合った事象から課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決することである。また、「人間性豊かな」は、友達の考えや思いを受け止め、自らの考えを伸び伸びと表現し、共に関わり合う中で自分を伸ばすことである。さらに、「たくましい子」は、たくましく生きるための健康や体力であるとともに「新しい時代を創造する」と「人間性豊かな」の相互作用によって育成される力強く生き抜く力のことでもある。

児童一人一人に主体的に問題を解決する力を一層つけ、それらをより広げ、深めることにより、何事に対しても自分で考え、判断し、たくましく生きていく児童に育てたいと考えた。また、友達と協力し、助け合ったり、みがき合ったり、高め合ったりしながら力強く生きていく児童に育てることも大切であると考え、「自ら学び、自ら考え、共に高め合う子どもの育成」という研究主題を設定した。

研究主題を具現化するには、すべての教育活動の中で意識し指導していかなければならないが、全職員が指導に関わることができ、全学年で指導ができ、毎時間問題解決的な学習に取り組むことのできる算数科を対象とすることが、本校教育を一層進めていくことにつながる。また、算数科の内容のもつ系統性や客観性から見て、日常の事象について見通しをもち筋道立てて考える力を育成することができやすいと言える。そこで、『算数科』を先導教科とし、副主題を「個に応じた算数科の学習を通して」とし、研究主題に迫ることとした。

III 研究の概要（選択した観点を中心に記述すること）

(1) 研究推進体制の工夫

授業研究部と環境研究部の2つに分かれて研究を進めた。授業研究部では、グループや一人一人の学習状況に応じた自力解決・練り上げでの支援や発展的な学習・補足的な学習の進め方などを中心に研究を進めた。環境研究部では、児童の意識調査・学力検査の分析や学習環境の整備を中心に行った。

(2) 研究の実際（個に応じた指導を中心として）

理論研究に基づき授業公開を行う。そこで、成果が見えたものについては他の学年でも継続的に指導していく。また、課題については次の授業研究会で新たな提案をするという形で研究を進めている。14年度7回（のべ14時間）、15年度6回（のべ11時間）の公開を行ってきた。

個に応じた指導についての基本的な考え方

学習を進める上で大切なことは、個々の児童の考えや思い、疑問などを生かして学習のねらいに迫ることである。一人一人の学びをしっかりと見取り、児童の学習状況を把握していくことにより、個に応じた適切な支援ができ、基礎・基本の確実

な定着を図ることができる。そしてそのことが、一人一人によく分かる楽しい学習を保障することになると考える。

① 指導体制

個に応じた指導を行うために、1、2年生では、学級ごとのTTを行っている。3年生以上では、1学年4人の指導者による少人数指導を実施しているが、児童の実態や単元の特性に応じて、1グループを1人で指導したり、TTで指導したりしている。そうすることでより高い効果を上げることをねらっている。

② グループ編成

基本的には以下のようなア、イ、ウの3種類のグループに分け、学習を展開している。しかし、児童の実態や単元の特性によっては、より主体的な学習ができるように、それぞれのグループを分割して指導する場合もある。

ア	基礎・基本となる問題をじっくり学習し、確実に身に付ける。
イ	基礎・基本となる問題をできる限り自分の力で解決し、みんなと話し合う。
ウ	基礎・基本となる問題を自分の力で解決し、みんなと話し合いながら、より発展的に学習する。

児童が所属するグループについては、各学年の指導者全員で、以下の項目を総合的に判断して決定している。

- ・算数科に対する意識調査
- ・単元に関するプレテスト
- ・それまでの学習状況
- ・本人、保護者の希望

また、所属グループについては単元ごとに見直し、児童の学習状況の変化や領域ごとの特性に対応するものになるように配慮している。また、指導者についても、継続して指導を必要とする場合をのぞいては単元ごとに入れ替わるようにしている。多くの指導者が多くの児童に関わることで、児童のよさを多面的に引き出したり、児童一人一人にあったグループを編成したりできると考えたからである。

③ 自力解決、練り上げ場面での支援（別紙1、2参照）

自力解決でのつまずきや解決方法の傾向を評価規準に照らし合わせ、「努力を要する状況（△）」「おおむね満足できる状況（○）」「十分満足できる状況（◎）」ごとに予想する。そして、それらに対する支援を事前に準備しておくことで、一人一人に適切な支援を行うことができると考えた。

ア 自力解決での支援

予想される児童の反応をもとに、それらに対する適切な支援ができるよういくつかのパターンに分けて事前に支援の準備をした。

イ 練り上げ場面での支援

本時のねらいを達成させる為には、練り上げ場面での教師の発問が適切であるかどうかにかかっているといても過言ではない。そこで、○に向けて、◎に向けての支援として、発問を書き入れることにした。そして、授業研究会では、教師の発問が適切であったのかを協議した。

④ 指導と評価の計画（別紙3、4参照）

単元において、前述の評価規準「おおむね満足できる」状況（B）を基に、十分満足できると判断される児童の状況（具体的な子どもの姿を記述）を◎とし、努力を要する児童への手立てを△として、評価規準などの欄に記述している。なお、各グループにおける努力を要する児童への手立て（支援）を→で記述している。併せて、評価方法も記述することにしていく。まずは、全ての児童を「おおむね満足できる」状況（B）にすることと、「おおむね満足できる」状況（B）の児童は、「十分満足できる」状況にしたいという指導者の願いを込めたものである。

⑤ 評価表の活用

児童一人一人の日々の学習状況を観点別の評価規準に照らし合わせ、評価表に継続的に記録することで、児童の変容を的確にとらえることができ、その後の指導に役立てている。

⑥ 発展的な学習、補充的な学習について

ア 単元の終末に学習内容の定着度を測る評価問題を行い、自己診断によって通常の学習と発展コースに分かれて学習を展開する。

イ 単元の終末に設定した。補充コースと発展コースの問題をあらかじめ児童たちに提示し、コースを選択できるようにする。

ウ 単元の終末に学習内容の定着度を測る評価問題を行い、自己診断によって補充コースと発展コースに分かれて学習を展開する。2時間扱いで、補充・発展コースとも2つ設定し、学習内容を段階的に扱う。

エ 単元の後半部分中途にア、イ、ウの3つのグループごとに発展的な問題を取り扱う。

オ 1クラスで、単元の終末部分にTTにより1時間、既習事項を大切にしながら問題作りを行う。

(3) 研究の成果と課題

〈成果〉

- ・ 発展的な学習に取り組むことで、教師の題材観に広がりが見られるようになり、指導の充実を図ることができた。また、各学年が発展的な学習の指導計画を様々な工夫することで、児童の学習状況や単元の特性に応じた方法を選択できるようになった。
- ・ 自力解決場面と練り上げ場面の支援に変化をもたせることで、児童により有効な支援を考えることができるようになった。また、発問の吟味も進み、本時目標達成へ向けて児童の思考を深めることができるようになった。
- ・ 自力解決でのつまづきや解決方法の傾向を評価規準に照らし合わせて予想し、それらに対する支援を事前に準備しておくことで、的確な評価や支援が可能になった。
- ・ TTや少人数指導を児童の実態に合わせ実施したことで、個に応じた評価や支援を行うことができるようになり、算数が好きな児童が年々増加し、現在85%となっている。また、算数が楽しいと答えた児童も90%となっている。さらに、高学年では少人数指導が好きと答えた児童が95%に達している。
- ・ 診断テストの結果では、13年度と14年度のテストを実施している3～6学年の4学年のうち、3学年で前年度を上回る結果が出ている。

〈課題〉

- ・ 評価規準をより明確にし、指導の焦点化を図ること。
- ・ 練り上げ場面でより思考を深めるための発問の工夫を行うこと。
- ・ 発展的な学習や補足的な学習として取り扱う教材の精選を行うこと。
- ・ 発展的な学習を1単位時間の中に取り入れる工夫をすること。
- ・ 共に高め合う学習を推進するための場の設定や人間関係を充実させること。
- ・ 問題解決力の育成や個に応じた学習をより充実させるために、本研究の成果を他教科・領域などへ発展させていくこと。
- ・ グループ編成の意図や視点を見直し、より効果的な少人数指導のあり方を探ること。

(4) 研究成果の普及の方策

① 研究発表会として

- ・ 日時 平成15年11月7日(金)
- ・ 場所 米子市立啓成小学校
- ・ テーマ 自ら学び、自ら考え、共に高め合う子どもの育成
～個に応じた算数科の学習を通して～
- ・ 対象 鳥取県西部地区小学校、県内フロンティアスクール、近隣の中学校など
- ・ 研究物 研究紀要と指導案集を参加者に配布し、本研究の概要を理解して頂いた。

② 啓発活動として

保護者や地域の方々には算数科をはじめ、本校の教育方針や状況について広く理解して頂くために、フリータイム参観日(3回のべ9日)、参観日(6回)を行い、学校・学年・学級だよりを配布している。
少人数通信を発行し、保護者へ学校の方針や指導状況、児童の感想などを知らせた。

- ◇ 次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)
- | | | | | |
|----------------------|---|--|--|-----------------------------|
| 【新規校・継続校】 | <input type="checkbox"/> 15年度からの新規校 | <input checked="" type="checkbox"/> 14年度からの継続校 | | |
| 【学校規模】 | <input type="checkbox"/> 6学級以下 | <input type="checkbox"/> 7～12学級 | | |
| | <input checked="" type="checkbox"/> 13～18学級 | <input type="checkbox"/> 19～24学級 | | |
| | <input type="checkbox"/> 25学級以上 | | | |
| 【指導体制】 | <input checked="" type="checkbox"/> 少人数指導 | <input checked="" type="checkbox"/> T. Tによる指導 | | |
| | <input type="checkbox"/> 一部教科担任制 | <input type="checkbox"/> その他 | | |
| 【研究教科】 | <input type="checkbox"/> 国語 | <input type="checkbox"/> 社会 | <input checked="" type="checkbox"/> 算数 | <input type="checkbox"/> 理科 |
| | <input type="checkbox"/> 生活 | <input type="checkbox"/> 音楽 | <input type="checkbox"/> 図画工作 | <input type="checkbox"/> 家庭 |
| | <input type="checkbox"/> 体育 | <input type="checkbox"/> その他 | | |
| 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 | <input checked="" type="checkbox"/> 有 | <input type="checkbox"/> 無 | | |

【特色ある取組事例としての紹介したいポイント(都道府県教育委員会記入)】